Takashi AKIYAMA Poster Museum Nagaoka 2017-09-01

APM news 176

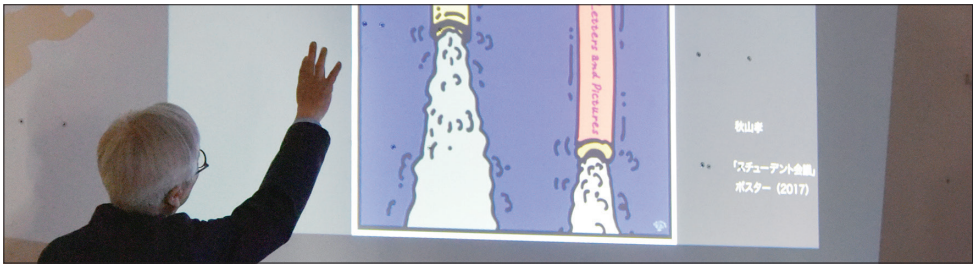
秋山孝ポスター美術館 長岡

歴史的建造物・金庫扉と雁木のある美術館（旧北越銀行宮内支店）

〒940-1106 新潟県長岡市宮内2-10-8
TEL 0258-39-1233

第38回美術館大学
「秋山孝の神秘3『パラダイム』～「考える枠組」と「表現する枠組」～2」

7月8日（土）pm3:00～pm4:30／受講者：57名／講師：秋山孝／進行：たかだみつみ



【表現する枠組】

秋山の研究領域は美術である。その側面から見るとアートとデザインの2つがあり、アートの「枠組」は「素材」、デザインの「枠組」は「条件」、とそれぞれ別の「枠組」を持っている。さらにデザインにはコミュニケーションツールとして「言葉と図像」「文字と絵」ということを意識することが重要であるという。秋山が自分自身に設定する「枠組」についての研究は、まずは過去の多くのアーティストが生み出してきた「枠組」を理解することから始まる。

アートの世界から見ていく。光と影の表現を確立したカラバッジョとレンブラント、フォービズム（野獣派）時代のマティスとルオー、抽象画を確立したピカソとブラック。さらに近代になると、それまで絵画は宗教と強い結びつきがあったが、そうではなく、宗教観を除いてもっと純粋に色と形を追求しようという「純粋美術」という考え方が生まれた。その代表的な美術家のバーネット・ニューマン、さらにはそれまでの絵画の枠組を壊してみたらどうなるか、ということを提唱したエルズワース・ケリー。

次にデザインの世界で見ていく。冒頭で提示したとおり、デザインにはコミュニケーションを要する。絵画とデザイン・ポスターは全く違う「枠組」を持ち、「枠組」が違うことによって考え方、目的が違ってくる。伝えるものも変わってくる。

講演では24人の画家、イラストレーター、デザイナーを取り上げ、彼らが作ってきた「枠組」を振り返った。秋山自身の「枠組」は、こうした過去に作られてきた「枠組」の理解、研究の連鎖で徐々にできあがってきたのだ。

では、具体的に秋山孝の「表現の枠組」を見てみる。まずは、「気合いが入っているものはつくりたくない」「自然感が大事である」と語る。また、ビビッドな色彩が特徴であるが、秋山は色には意味があると捉え、色選びにはとてもこだわっている。色数も最小限に留め、時には音が聞こえてくるような表現をしたいと試みている。さらに、作品によっては社会、時代をテーマに作品を制作することも重要としている。

これらの「枠組」はほんの一部であるが、秋山の作品を見ているとこれらの「枠組」が見えてくるのではないだろうか。見る側が共通の「枠組」を理解すること、それこそが秋山の「個性」として認識され評価されることとなった。正に「物の見方における支配的な認識の枠組」である。

秋山孝の表現の秘密を解き明かすことを目的とするこの「秋山孝の神秘」シリーズであるが、秋山はなぜ自ら企業秘密を明かすようなことを行うのか。なぜなら、そのような秘密を解き明かすことが学問というものだからである。アーティストであると同時に大学教授である秋山だからこその研究テーマではないだろうか。これも秋山孝の「パラダイム」のひとつである。

（たかだみつみ・APM事務局長、学芸員／APM公式ホームページより抜粋）